

学位請求論文審査報告要旨

2012年2月8日

申請者 史 隼

論文題目 日中指示詞の対照研究

論文審査委員 庵 功雄

井上 優

石黒 圭

1. 本論文の内容と構成

本論文は、これまでのアプローチとは異なる形で日本語と中国語の指示詞の用法の対照研究を行い、それを通して、それぞれの言語における指示詞の機能を明らかにしたものである。本論文の構成は次の通りである。

第1部 研究の概観

序章

- 1 研究目的
- 2 研究対象
- 3 研究方法
- 4 理論上の枠組み

5 論文の構成

第1章 先行研究とその問題点

- 1.1 日本語指示詞の先行研究
- 1.2 中国語指示詞の先行研究
- 1.3 日中指示詞対照の先行研究
- 1.4 先行研究から見られた問題点

第2章 日中指示詞の用法

- 2.1 日中指示詞
- 2.2 日中指示詞の構成体系
- 2.3 日中指示詞の形態
- 2.4 日中指示詞の文法的機能
- 2.5 日中指示詞の語用的機能
- 2.6 本章のまとめ

第3章 日中指示詞に関する諸問題

- 3.1 概念
- 3.2 日中指示詞の対応形式
- 3.3 中国語指示詞の「虚化」
- 3.4 この論文で扱う日中指示詞の問題点
- 3.5 先行研究との結びつき
- 3.6 本章のまとめ

第2部 日中指示詞の具体的な対照

第4章 中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の機能

- 4.1 問題提起
- 4.2 同格構造
- 4.3 所属構造
- 4.4 両構造の類似性
- 4.5 日本語との対照
- 4.6 助指
- 4.7 本章のまとめ

第5章 「指示詞+QN」構造における日中指示詞の対照

- 5.1 問題提起
- 5.2 両指示詞の比較
- 5.3 指示詞の機能に関する考察
- 5.4 使用条件の再考察
- 5.5 指示詞の機能
- 5.6 本章のまとめ

第6章 複数の修飾要素を含む名詞句における日中指示詞の機能

- 6.1 問題提起
- 6.2 先行研究
- 6.3 分類
- 6.4 中国語指示詞の考察
- 6.5 日本語指示詞の考察
- 6.6 指示詞の機能
- 6.7 本章のまとめ

第7章 照応用法における日中指示詞の対照

- 7.1 照応
- 7.2 問題提起
- 7.3 「その」の照応用法
- 7.4 中国語指示詞の照応用法

7.5 本章のまとめ

終章

- 1 この論文の視点
- 2 先行研究との理論づけ
- 3 各章の内容
- 4 残された課題

引用文献

参考文献

データ資料

2. 本論文の概要

本論文は2部構成であるが、第1部では研究の枠組みに関わる諸概念が述べられる。

序章では、本論文の研究目的と研究方法が述べられる。本論文の研究目的は、日本語／中国語で指示詞が使われているのに、それに対応する中国語／日本語で指示詞が用いられない「非対応」の場合を対象に日中指示詞の対照研究を行うことにより、「対応」の場合のみを対象としてきたこれまでの研究では明らかになってこなかった両言語の指示詞の諸相を明らかにすることである。そのために、日中対訳小説、中日対訳小説を用いて、上記の条件にある表現を全て採取し、現場指示と文脈指示に分けて分類する。次に、分類された諸例を分析する。

第1章では、日本語研究、中国語研究、日中対照研究のそれぞれの観点からしたこれまでの主要な研究が概観される。

第2章では、日中指示詞の用法と機能が詳述される。本論文では、中国語の指示詞に「指示機能」「代用機能」「文脈承前機能」「区別機能」「話題標識」「助指」の6つの機能を認める。そして、「談話標識」と「助指」においては、指示詞はその指示性を弱め、文法化（中国語研究では「虚化」）しているとする。

第3章では、第2部で行われる事例研究においてポイントとなる点がまとめられる。第一に、日本語の「こ（そ・あ）の+N」は中国語の「这（那）+量詞（助数詞）+N」に対応し、指示詞を含む名詞句の意味、とりわけ類指示（この（種としての）花／这个花）と個体指示（この（個体としての）花／这枝花）の区別に関して、中国語では量詞が重要な役割を果たしていることが確認される。第二に、中国語で指示詞が使用され、日本語で使用されないことに中国語指示詞の「虚化」が関わっていることが述べられる。

第2部では、日中指示詞に関する事例研究が現場指示と文脈指示に分けて行われている。現場指示については、第4章から第6章にかけて論じられている。これらに共通するのは、中国語では指示詞が使われるのに対し、日本語では使われないということである。一方、文脈指示については、第7章で論じられているが、これは日本語では指示詞の使用が義務的なのに対し、中国語では指示詞を使うことができないという場合である。各章の具体的

な内容は以下の通りである。

第4章では、中国語の「N1+指示詞+N2」構造が扱われる。この構造は、N1とN2が同一事物か否かによって「同格構造（张华这个人「張華という人」）」と「所属構造（他那本书「彼のその本」）」に分けられる。同格構造と所属構造は従来別々の構造を有するものとして考察されてきたが、本論では、両構造がN2に対する評価を述べる文で用いられることが多いことに注目し、両構造において指示詞は「N1に関わる出来事を指示する」という共通の機能を有することが主張される。また、この種の指示詞の用法は通常の指示に比べて指示の力が弱まった「虚化」の用法であり、日本語の指示詞はこのような機能を持たないことが述べられる。同格構造と所属構造を同一構造として説明することについて十分説得力のある議論が展開されているとは言えないが、アイデア自体は斬新であり、「N1+指示詞+N2」構造の意味に関する母語話者の直感をうまくとらえている部分がある。

第5章では、「这么（このように）」「那么（あのように）」を含む中国語の「指示詞+数量詞+名詞」構造を扱う。著者は、この構造は「強調」と「概数」の二つの用法があり、前者においては指示詞が数量強調の機能、後者においては指示詞が「数量の程度化」の機能を持つとする。また、「数量の程度化」の機能は「強調の指示詞」の機能が虚化されて派生したものと説明する。日本語では指示詞がこのような形で用いられることはなく、「強調の指示詞」の機能は副詞などが、「数量の程度化」の機能は概数表現「ぐらい」「ほど」が担う。「強調」用法と「概数」用法の関係について十分に説得的な議論が展開されているとは言えないが、「这么」「那么」が「数量の程度化」機能を有するという指摘は現象の本質をとらえた指摘であり、以後の研究において参照されるべき部分である。

第6章では、二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句が考察対象となる。具体的には、「指示詞先頭型（D+M+M+N）、指示詞末尾型（M+M+D+N）、指示詞中間型（M+D+M+N）（D:指示詞、M:修飾成分、N:名詞）」における指示詞の機能の違いが論じられ、中国語では、これら三つの構造において、指示詞は「指示詞先頭型＝特定化する機能」、「指示詞末尾型＝他と区別する機能」、「指示詞中間型＝具体像を指す機能」のように異なる機能を有するが、日本語ではそのような機能差はないことが指摘される。「特定化する」、「他と区別する」、「具体像を指す」ということが必ずしも理論化された形でとらえられていないという問題点はあるが、現象の観察と整理には見るべきものがある。

第7章では、日本語の文脈指示の「その」を含む名詞句とそれに対応する中国語の表現について検討される。そして、「その」には「持ち込みの『その』」、「言い換えの『その』」という「内包レベルでの照応」の用法があるのに対し、中国語の指示詞にはそのような用法がないことが指摘される。中国語の指示詞に「持ち込みの『その』」、「言い換えの『その』」に相当する用法がない理由に関する考察は必ずしも十分ではないが、指摘されている現象は非常に重要な現象であり、また現象の整理のしかたも基本的に妥当なものと言える。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の最大の成果は、これまでの指示詞の日中対照研究では俎上に上ってこなかった、一方では指示詞が使われるのに他方では使われない場合に研究対象を絞り、特に中国語に関する興味深い言語現象を掘り起こしたことである。

第4章から第6章で扱われている現象はこれまで散発的に指摘されてきたものであるが、著者はそれをより深く考察し、日本語研究の成果も視野に入れながら、母語話者の内省を自然に斬新かつ現象の本質により迫る解釈を提示することに成功している。ここで得られた知見は、現在盛んに研究されている指示詞の「虚化」用法の内包をより豊かにするものとなっている。

文脈指示を扱った第7章における文脈指示の「その」とそれに対応する中国語の指示詞の問題はこれまで「持ち込み」「テキスト的意味の付与」という形で論じられてきた「その」の機能を新たな観点で取り出すことに成功している。日本語の「その+N」のNは普通名詞でも総称名詞でもいいのに対し、中国語の場合は普通名詞でなければならないという指摘は重要である。

このように優れた成果をもたらした本論文であるが、問題点も存在する。

第一に、扱われている現象が中国語に偏っている点が挙げられる。指示詞の研究は文法研究の中でも分析のための理論的枠組が整備されている分野であるだけに、日本語との対照をもう少し展開させてほしかったところである。

第二に、全体的に直感的な分析の域を出ておらず、ここで見られるような両言語の「ずれ」が生じる原因に対する原理的追求があまりなされていない点が挙げられよう。なぜ、一方では指示詞が使われなければならないのに他方では指示詞が使われないのかという問題を、両言語の統語的その他の特徴と結びつけて論じる部分がもっとあってもよかつたのではなかろうか。

しかし、このような問題点が存在するとは言え、本論文が優れた研究を成し遂げたことを否定するものではない。本論文の価値は、新しい対照研究の可能性を示したことと指示詞研究に新しい視座を提供したことであり、日中対照研究史上重要な位置を占めるべきものである。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると認められる。

最終試験結果の要旨

平成 24 年 2 月 8 日

論文審査担当者

庵 功雄

井上 優

石黒 圭

平成 24 年 1 月 26 日、学位請求論文提出者 史隼 氏の論文「日中指示詞の対照研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、史隼 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、史隼 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。